鳥取の民話

収録・解説　酒井董美（ただよし）

11

「笑い話」の中の「誇張譚」

博奕打ちと呪宝

（倉吉市湊町）

語り手　名越雪野さん（明治40年生まれ）
昭和55年9月17日収録

あらすじ

昔、博奕（ばくち）打ちが博奕に負けてしまい、1枚のウチワしかなくなった。しかたなく山に上がって、「京見たか。大阪見たか。大阪見たか、京見たか」とあっちこっち見たりしていた。

すると、天狗（てんぐ）が「おまえは『京見たか、大阪見たか』て言ったが、そんなこって大阪や京が見えたかい」と木から下りてきた。

博奕打ちは、「このウチワをかざせば、あっち向きゃ京が見えるし、こっち向きゃあ大阪が見える」と言った。天狗もウチワを1枚持っていて、「こんなと替えよかい。これは千里ってったら、千里走るし、鼻高んなれ言うと高くなり、低うなれ言うと低くなる」と言う。「なら、替えましょう」と交換した。天狗はそのウチワで、「京見たか、大阪見たか」と言ったが、さっぱり見えなかっが、博奕打ちは「千里」と言ったら、走ったので、天狗が負けてしまった。

博奕打ちは江戸まで行った。そのときに鴻池のお嬢さんの婚礼の行列が進んできて、祝言歌をうたうところに来て止まった。博奕打ちはその車の後ろについて「ウチワを使ってみたろうかい」と「鼻、高んなれ」言ったら、お嬢さんの鼻が天狗の鼻のようになり大騒動になった。

翌日、表の通りを鼻治しになった博奕打ちが通ったら呼び止められて1週間で治し、家の人たちは、まるで神様のようにして喜んでくれた。

博奕打ちは、お金はたくさんできたし、とうとうわが家へ戻って来た。

博奕打ちは、天神川の河原に出てあおむけになって、そのウチワで「鼻、高んなれ」とやったところが、1丈（約3㍍）にもなった。そこで博奕打ちは、どのくらい高くなるか、もっと高くしてやろうと思って「高んなれ」とウチワをあおいでいたら、天に届いてしまった。

天では天竺（てんじく）から神様の子どもが遊びに来ていて、伸びてきた鼻を見つけ「ここへ何だか出てきたぞ」と言っていると、いくらでも伸びてくる。

「これはじゃまになる。隠れっこするのに引っかかってかなわん」「そんならくくっとけ」と近くへくくってしまった。

博奕打ちは、そのようなことと知らず、「このへんで低うにせにゃ」と「低んなれ」と言ったら、自分の身体がドッドドッドド持ち上がってしまい、くくられているからズッズズッズと1丈も上がってしまった。

「それから先は話すだか」「話しないな」「はなせば、ポテーンと落ちちゃった。そういうことだぞ」

解説

関敬吾『日本昔話大成』では、「笑話」の中の「誇張譚（たん）」に「鼻高扇」として分類されているのが、この話型に相当している。

（元鳥取短期大学教授）

イラスト・福本隆男

（水曜日に掲載）

鳥取県立博物館HP「鳥取の民話」コーナーで語り手の音声が聴けます。